
Fairy and Flower

未来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fairy and Flower

【NZコード】

N5201Y

【作者名】

未来

【あらすじ】

今から何百年も昔。小さな森で生まれた自然と共に暮らす妖精がいました。人口が増えた人間は街を作るために森林破壊を進め、たくさんの木や花の命を奪ってしまいました。動物と魔女は行き場を失い、次々と旅立ってしまいます。森に命がなくなりかけ、たつた一人残った妖精、リリイは人間への憎しみを覚えました。はじめて憎しみを覚えた時に出会った人間。それはとても幼く、弱く、小さな命を持つた少年でした。

ある秋のこと。

小さな小さな森で黙々と木の実を取つてゐる子供がいました。
少年、と呼ぶには少し幼い男の子です。

「ママなんてだいきらい。パパはもっともっときらい」

突然、男の子は森で一番大きな木に話しかけました。

返事が返つてくる訳でもなく、秋風が静かに吹いているだけ。
男の子は何を期待していたのでしょうか。

ただ木の上を見つめ、次々と風に吹かれ、落ちてくる葉を名残惜しそうに見つめているのです。

「どうして？」

さわさわと揺れる枝の上から声が聞こえてきました。

男の子は一瞬驚きましたが直ぐに瞳を輝かせ、口を開きます。

「だつて、ママはいつもねでいてちつともおきてくれない。それに、パパはまんげつのひにしかかえってこないんだもん」

「泣かないで。小さな人間さん」

大きな瞳から溢れだす大粒の涙。
声の主は優しく宥め、ゆっくりと木の上から降りて来ました。

「……だあれ？」

音もなく男の子の前に降りたのは透明な羽を持つとても美しい少女でした。

腰まで伸びたふわふわの茶色い髪が太陽に照らされてもうきらと透き通っています。

男の子にはお伽話に出でくる妖精のように見えました。

「こなんにちは」

男の子は驚いてただ少女を見つめている」としかできません。

「こんにちは。 小さな人間さん。 あなたのお名前は?」

少女はにっこりと微笑み、もう一度声をかけました。

「ぼ、ぼくはリーフ」

リーフと名乗った男の子はおどおどしながらも勇気を出して答えた。

「私はリリイ。この森で生まれた妖精よ。リーフ。あなた達人間が来る前からずっとこの森に住んでいるの」

「ようせい？……ほんとう？リリイはほんとうにようせいなの？」

「そうよ。姿を見せた人間はリーフが初めてだわ。私ね、今とても暇だったの。何かをしたくてうずうずしているの」

リリイはリーフから目をそらさずにふわふわと飛び回ります。まるで何かを待っていたかのように。青い瞳をきらきらと輝かせながら。

「ねえ、リリイ。そんなにひまなりぼくとあわまつよー。」

「あら。嬉しい。何して遊ぶのかしら？」

「きのみとつーぼくとリリイ。どっちがこちばんおおくとれるかな
あ？」

こうしてリーフといふ小さな人間に懐かれた妖精、リリイ。
毎日のように遊びに来るリーフを少しだけ信頼しました。
しかし、リリイの心には大きな傷と小さな憎しみがあります。
決して消えることのない傷跡と少しづつ広がる憎しみが。

秋の終わりが近づく頃、リーフが遊びにこない日が何日も続きました。
冷たい風が吹く中でリリイは退屈そうに木の枝に座り、足を揺らしています。

「これだから人間は信用出来ないのよ……暖炉の牧と言つて残り少ない命を次々と奪つて、そろそろこの森は終わりかしら。魔女も動物もみんなみんな、命を捨てて行つてしまつたわ。木を花を……自

然を何だと思っているのかしら」

リリイの憎しみは人間だけではなく森を出て行つた魔女や動物にも
向けられました。

「……木を殺したのは大人よ。リーフは悪くないわ」

リリイは自分に言い聞かせるように咳きます。

どんなに人間が憎くても小さな人間には罪はありません。

リーフが憎い人間になってしまわないようリリイは考えました。

「様子を見に行ってみましょ」

考えがまとまらないリリイはゆっくりと雲で覆われた空を飛んで、森を半分以上破壊して作ったリーフが住む街に向かいました。
もしかして、あの小さな人間も森を、自然を殺したのか。そんな不安がリリイの中に広がります。

レンガで埋め尽くされた地面。

その地面の上に我が物顔で建つてある建物。

街を見渡すと緑はどこにもありませんでした。
土すらもありません。

「酷いわ……こんなに自然を殺してしまって。人間は自然がないと

生きていけないことを知らないのかしら。残酷すぎるわ」

派手なドレスを着たご婦人。片手に杖を持ち、偉そうに革靴を鳴らして歩く老人。この街は裕福な家庭が多く自然を殺す人間で溢れているように見えました。

リリイは涙が出そうなのをじらえて街を探索していきます。

純粋な人間にしか見えない、森の妖精はすれ違う人間を睨み、憎しみで心が埋まつていくを感じました。

しばらく自分を見えない人間に囮まれていましたがある日ぐ大きな建物の前に着くと窓から自分を指す子供達がたくさんいました。

リリイは純粋な心に触れ、憎しみが少し薄れていくを感じ、子供達に微笑みかけます。

「ようせこさんだあ！」

「えほんとおんなじできれいなひとだね」

「よつせこさん！わたしどおはなししようよ」

「ぼくもおー！」

几帳面に並んだ四角い窓からは子供達の小さな手がリリイを招いています。

たくさんの子供達の中にコーヒーはいませんでした。

よく耳を澄ますと子供達がこる一つ上の窓から泣き声が聞こえてきます。

リリイは子供達に素早く近づいて一階には何があるのか。問い合わせました。

すると子供達は口々に答えます。

「ほんたうのおやがあるんだよー。」

「みんながおやすみあるといいです。」

「わたしどんなじねやない、あたらしいおもちゃたのめんがいるんだよ。おとこのいなのにおまかせてこらへるの。」

コーヒーと回りへひこの女の子が悲しげに泣こます。

「コーヒー、コーヒーがこるのね。どうして泣こらへるの?」

泣こでいる理由が分からず、リリイはとても心を配りました。

「 むつかせこせんはリーフくんのおともだちなの？あのね、パパとママにきらわれちゃったからないでいるんだって。いんちゅうせんせいはそつとじとこであげてつてつていたよ」

「 もう。リーフとはお友達なのよ。院長先生？……ここは孤児院なのね。あなたも今日から私のお友達よ。可愛い人間さん。お名前を教えてちょうだい？」

リリイはこの建物が孤児院と分かり少し悲しくなりました。
こんなにも愛らしく、可愛い人間をどうして捨ててしまつのかリリイには理解できません。
せめて純粹な心を持つ田の前の子供達が真っ直ぐに育つて欲しいと願いをかけます。

「 ほんとう~あのね、わたしのなまえはリカ。ここはずっとすんでいるの~ようせこせんは？」

「 リカ。とても可愛い名前ね。私の名前はリリイよ。この先にある森にずっとずっと住んでいるの。リーフの涙が枯れた時に一人で遊びにいらっしゃい」

「 ありがとう~リーフくんとこつしまぜつたあそびいへー！」

玩具が散乱している部屋を見渡すといつの方に他の子供達は自分

の部屋に戻っていました。

気が付くと空は群青色に染まり、いくつもの星が光っています。

「よつせこのリリイさん。いんちゅうせんせいがよんでいるからバイバイ！」

奥の部屋から院長先生が顔を出して手招きをしています。
どうやらリリイが見えていないようです。
優しそうな院長先生も大人。純粋な心はもう薄れてしまっているの
でしょう。

「さよなら。ララ」

リリイに向けて勢いよく駆けて行くララ。

名残惜しそうにその小さな背中を見つめる妖精は数分前に交わした
約束を思い出していました。

『ねえ、ララ。一つだけ約束して欲しいことがあるの』

『やべやべ。』

『そ、う、よ。聞、いて、く、れ、る、?』

『「つ、そ、ひ、ー、」』

『私のことをリーフ以外にお話しないでほしいの。妖精、リリイがいることは二人だけの秘密よ』

『ひみつ…ビ、ジ、ン、シ、ヒ…リリイはみんなとおともだちになれないの?』

『そ、う、よ。私はララとリーフとしかお友達になれないの。だから秘密にするって約束してくれるかしら?』

『「うーん。わかったー!ひみつってやべりやべるー。リーフともやべるー!」

『ありがとう。ララ』

リーフの姿を確認出来たりリリイは安心して森へ帰りました。

ララといつ可愛らしい人間と友達になり、すぐに一人が森に遊びに来ると思っています。

しかし、何日経っても一人は現れません。

その間にも人間はリリイの生命の源でもある木々を殺し、煉瓦で土を隠し、人間の領域を広げていきます。

雪が降りそうで降らない日々が続き、リリイはとても焦っています。

雪と共に木と眠りに就く。

この森で生まれた時から何百年も続けていたことです。

リリイが眠っている間に森が消えてしまっていたらリリイという妖精は生き場を失ってしまいます。

この世界の人間が自然を殺さずに暮らせる環境が出来ればたくさんの命が救われる。

答えを出すのは簡単なことですが実行するにはとても難しいことです。

次の日も次の日もそのまた次の日もリリイは木の根元で一人を待ち続けていました。

冬になりました。

枯葉は少しずつ散り、風が冷たく吹く中、二人の子供はゆっくりと森へ向かっています。

森は驚くほどがらりとしていました。

花は枯れ、木の実は無くなり、落ち葉が辺り一面に敷き詰められています。

「…………リリイ？」

男の子は小さな声で大きな木に呼び掛けました。

「久しぶりね。リーフ。ララ……元気にしていたかしら？」

リーフとララの頭上から弱々しく綺麗なリリイの声が聞こえてきます。

「ひさしひ。リリイ。ぼくはげんきだよ」

「うそですか。コレヤをさ。ビリニコの？」

「……こりよ。もう一人には見えていないのね」

ザアと風が音を立てて強くうなり声をあげました。

木に残つていった葉は次々と飛ばされ、やがて木には一つも葉が無くなりました。

リリイは静かに言います。

「『い』みんなさご。『う』あなたと遊んであげられなくて。でも私、ずっとこの木で待つっていたのよ。その間にもたくさんの命が消えてしまつたわ」

「い』みんな。リリイ。あのね、ぼくのママはしじやつたんだ。ママがずっとねていたのはぼくがうまれたから、からだがよわくなつちやつたの。パパがそういうつてた。ぼくね、ずっとかんがえていたんだ。ママはぼくがうまれたからしんじやつたのかなつて。ママはきっとぼくのことときらこだつたんだよ。ママのそばにいても『お外で遊んでらっしゃい』つてママはぜんぜんぼくとおはなしをしてくれないから、ぼくのせいでねていないとけなくなつちやつたら、ぼくを……ぼくを見るのがいやだったの。ママはぼくのせいでしんじやつたからゆじしてくれないのかな?パパもぼくのこときらいなのかな」

「コーヒーはまだ飲んでないのに、もうおつまみを出しちゃう」と、リラックスした口調で、アーティスティックな女性が笑顔で話しかけてきた。

「コーヒー。それは違うわ」

「ソーヴィは優しく話しかけてました。

「ちがい……？」

「泣かないで、リーフ。ママはあなたのことを嫌いではないわ」

「でも、ママはあなたをなじしてくれなかつたよ」

完全に透き通つてしまつたリリィの手が優しくリーフの頭を撫でます。

突然感じた柔らかい感触に体を硬直させたリーフ。
すぐに正体がリリィだと分かり、安心しました。

「ママはね、病気がリーフに移らないようにお話するのを我慢して
いたのよ。本当はリーフと遊びたいのに、お話をしたいのに、でもず
つと我慢してこたのよ」

「ママはぼくがつまられたからびよしきになつたんだ。だから、しん
じやつたの。がまんするなりほくなんて……」

次々と溢れだす涙が邪魔して言葉が出てきません。

隣で見ていたララは何も言わずにそっとリーフの手を両手で包み込みました。

「違うわ。ママはリーフを愛しているの。ママが死んでしまったのはリーフ、あなたのせいではないわ。これはきっと運命よ。ママの命は決まっていたの。だから、ママはあなたを産んで良かったと思つているわ」

リリイは母親が子供を宥めるよつてリーフに言い聞かせました。

「ほんとう? リリイ。ママはほくのことをきりいじやなかつたのかな。あいしてくれていたのかな……。つんめいってなに?」

「コーコーくさ。つんめいはね、だれもかえられないんだよ。わからないけどきまつているの」

大人しくリーフとリリイの会話を聞いていたララはこいつと笑いかけます。

その姿を見てリリイは安心しました。

灰色の雲によって薄汚れていた空は急に暗くなり、白く、冷たい結晶がはらつ、はらつ、と落ちてきました。

「ゆだ。ゆだよ、リリイ。ねえ、ララー。」

「うん！ ゆきだね！ とてもきれいだよ」

二人は小さな手を精一杯空に向かつて伸ばしています。
リーフの顔から涙が消え、笑顔が浮かび上りました。

「時間ね……」

「じかん?..どうしたの?..リリイ」

リリイはとても寂しそうに呟きました。
リーフは不思議そうに首を傾げます。

「リーフ。ララ。よく聞いて。どんな物にも命があるの。花、木、
草、葉。一つ一つに小さくても命が宿っていて生きているのよ。だ
から一人共、森を、命を……」

「リリイ?..」

「リリイさん?..」

だんだん弱々しくなるリリイの声、リーフとララは心配そうに辺りを見渡します。しかし、リリイの姿は見えません。

「森にも命があるの。私が生まれ、生きた森を殺さないでね。ビバ
かお願い。命を大切にして……」

辺り一面が雪でおおわれて真っ白になりました。

静まり返った白い森には小さな人間が並んで立っています。

もう、リリイの気配も声も何も感じません。

沈黙に耐えられず、リーフは空に向かつて叫びました。

「リリイー・ビバ！ ここの森の？ もうあえないの？ これもうん
めいなの？ リリイってばー！ じたえてよ……」

「リリイさん！ わたし、まだいちどもあそんでいないよ。おねがい
だからへんじをしてよ？」

妖精、リリイは森と雪と共にこの小さな人間の前から姿を消してしまいました。

何年か月日が経ちました。

寒い冬が過ぎ、暖かい春の季節。

リーフは院長先生からクリスマスプレゼントに貰つた花の種を持つてララを連れて出かけて行きました。

泣いてばかりいた男の子の面影は薄れ、茶髪が目立つ整った顔立ちの少年へと成長したリーフ。

長かつた焦げ茶色の髪は肩の上で綺麗に切り揃えられ、ピンクのワンピースがよく似合つ可愛らしい少女へと成長したララ。

二人はあの時と同じように並び、森を手指してゆっくりと歩いています。

しかし、細い小道を抜け、たどり着いた先は地面が真っ白な煉瓦でおおわれたとても広い所でした。

真ん中には小さな時計塔。それを囲むように小さな花壇がありました。

「『めんね。リリイ。僕達はリリイの生まれた森を守る』」ことが出来なかつた

リーフは時計塔の前に膝をつき、居るはずの無い妖精に語り掛けました。

返事は無く、春風がリーフの前髪を揺らします。

ララはそつとリーフの隣に座り、話し掛けました。

「仕方ないよ。リーフ。私達は子供だったから、幼かつたから、何も出来なかつた。仕方ないの」

ララはリーフを慰めるように言いました。

リリイが去つた後、人間の心に憎しみが増え、領土や地位を奪い合う醜い争いが始まりました。

リーフ達が産まれた街は貴族が多く住む、恵まれた環境にありました。

小さくもなく、大きくもなく、治安が良い街はすぐに大国に狙われてしましました。

穏便な話し合いが出来るはずもなく、次々と街に攻め入る兵士。

貴族達は戦いの先頭に立ち、兵を集め、戦いましたが三日も保たずに大国の兵士に鎮圧されてしまいました。

リーフ達が住む孤児院は崩壊し、子供達は数人しか生き残りませんでした。

幼いながらに街の危機を感じ、燃え上がる孤児院をララと抜け出して森へ向かつたリーフ。

二人が森に着いた頃は既に森は焼け、黒い煙におおわれた野原のようになつていました。

大国に負けてしまつたただの街は国の一部として支配され、たくさんの命を奪われました。

幼かつたりーフとララは国民として受け入れられ、孤児院と言つ名の軍事学校に入れさせられてしまったのです。

森が生きていた場所には大きな広場が出来ました。

小さな時計塔はリーフが授業の実習で作ったものです。

時計塔の周りにはララが小さな花壇を作りました。

この大きな広場が何のために作られたのか二人は知りません。

「仕方ない、か。悔しいな。僕がもつと大きかつたら森を守れたかな？」

「そんなの分からないよ。私達は出来る事から始めればいいの。それよりリーフ。今日は花の種を植えるのでしょうか？」

「……そうだね。これも運命なのかな。花の種というよりはラズベリーの実だよ」

二人は種を取り出すと丁寧にラズベリーの実を埋め始めました。ふと、ララが独り言のように呟きました。

「妖精のリリイさんは何者だったのかな……？」

雲一つない真っ青な空。太陽の光が優しく世界を照らしています。

「ここにも縁がない真っ白な広場には新たな命を誕生させようと希望に満ちた手で作業をする少年と少女。

少年、リーフは少し考えてから少女、ララの質問に答えました。

「森の命だよ」

妖精、リリイはこの森 자체だったのかもしれません。
この小さな物語はリーフとララだけの秘密のお話し。

今日も一人は命の大切さを心に、仲良く帰つて行きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5201y/>

Fairy and Flower

2011年11月17日21時43分発行